

ワークショップ「福井」

■日時 2011年12月8日(木) 14:30~17:00

■場所 福井大学文京キャンパス アカデミーホール集会室

福井大学において、福井県教育委員会の後援のもと、経済教育ワークショップを開催した。2008年から四年目となる今回は約50名の参加者を得て、高校における経済教育のありかたについて二名のスピーカー講演のあと質疑があった。

【プログラム】

14:35~15:40 「教科書(政治経済・現代社会)を読み解く『金融』」

野間敏克(同志社大学政策学部)

15:50~16:55 「高等学校歴史を経済の視点で読み解く」

篠原総一(同志社大学経済学部)

【ワークショップの要約】

前半は、野間が政経・現社の教科書(東書)に沿って、金融に関係する部分を確認し、経済学・金融論の考え方を補足しながら、近年の話題との関連を解説した。とくに取り上げたのは、「直接金融と間接金融」、「利子の役割」、「サブプライムローン問題」の三点である。間接金融の本質は銀行などによる資産変換とリスク負担にあることなどが解説された。

後半は篠原総一氏(経済教育ネットワーク代表)が、高校の日本史の教科書から第一次大戦前後の高橋是清の財政金融政策をとりあげ、経済の視点から解説した。まず金本位制度の本質として、為替レートが固定レートになることや、資本移動を自由化したままだと裁量的な金融政策がとれなくなることを確認した後、金本位制度の停止、復帰、再離脱の課程や積極財政のねらい、井上準之助との考え方の違いなどが解説された。現社・政経よりも歴史の方がストーリー性があり、経済の視点を使えば、歴史的な出来事がみごとにつながって理解できることが示された。

(文責:野間敏克)